

**[D年] 聖霊降臨節第 18 主日(2024年9月15日)****【旧約聖書日課】 歴代誌下 7章11～16節**

11ソロモンは主の神殿と王宮を完成し、この神殿と王宮について、行おうと考えていたすべての事を成し遂げた。

12その夜、主はソロモンに現れ、こう仰せになった。「わたしはあなたの祈りを聞き届け、この所を選び、いけにえのささげられるわたしの神殿とした。13わたしが天を閉じ、雨が降らなくなるとき、あるいはわたしがいなごに大地を食い荒らすよう命じるとき、あるいはわたしの民に疫病を送り込むとき、14もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。15今後この所でささげられる祈りに、わたしの目を向け、耳を傾ける。16今後、わたしはこの神殿を選んで聖別し、そこにわたしの名をいつまでもとどめる。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せせる。

**【使徒書日課】****エフェソの信徒への手紙 3章14～21節**

14こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。15御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。16どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、17信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。18また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広

さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、19人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。20わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、21教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

**【福音書日課】****ヨハネによる福音書 10章22～30節**

22そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。23イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。24すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」25イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。26しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。27わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。28わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。29わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。30わたしと父とは一つである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 歴代誌下 7章11～16節

11ソロモンは、主の神殿と王宮を完成し、また、主の神殿と王宮の中に造りたいと思っていたものすべてを造り終えた。12その夜、主はソロモンに現れ、こう言われた。「私は、あなたが乞い求めた祈りを聞き、この所を、いけにえの献げられる私の神殿として選んだ。13私が天を閉ざしたため雨が降らなくなるとき、あるいは私がばったに大地を食い尽くすよう命じるとき、あるいは疫病を私の民に送るとき、14もし私の名で呼ばれている私の民が、へりくだって祈り、私の顔を慕い求め、悪の道から立ち帰るなら、私は天からそれを聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの大地を癒す。15今この所で献げられる祈りに、私は目を開き、耳を傾ける。16今、私はこの神殿を選んで聖別し、そこに私の名をとこしえに置く。私の目、私の心はいつもそこにある。」

## エフェソの信徒への手紙 3章14～21節

14-15このようなわけで、私は、天と地にあって家族と呼ばれているあらゆるものの源である御父の前に、膝をかがめて祈ります。16どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださいますように。17あなたがたの信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住んでくださいますように。あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となるこ

とによって、<sup>18</sup>すべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどのものかを悟り、<sup>19</sup>人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れる者すべてに向かって満たされますように。

<sup>20</sup>私たちの内に働く力によって、私たちが願い、考えることすべてをはるかに超えてかなえることのできる方に、<sup>21</sup>教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々わたって、とこしえにありますように、アーメン。

## ヨハネによる福音書 10章22～30節

<sup>22</sup>その頃、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。<sup>23</sup>イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。<sup>24</sup>すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、私たちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」<sup>25</sup>イエスはお答えになった。「私は言ったが、あなたがたは信じない。私が父の名によって行う業が、私について証しをしている。<sup>26</sup>しかし、あなたがたは信じない。私の羊ではないからである。<sup>27</sup>私の羊は私の声を聞き分ける。私は彼らを知っており、彼らは私に従う。<sup>28</sup>私は彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、また、彼らを私の手から奪う者はいない。<sup>29</sup>私に彼らを与えてくださった父は、すべてのものより偉大であり、誰も彼らを父の手から奪うことはできない。<sup>30</sup>私と父とは一つである。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・9月15日「聖霊降臨節第18主日」の日課主題は「キリストの住まい」。
- ・旧約聖書日課は、「歴代誌下」から、ソロモン王が神殿建設を完成させた際に神から告げられたことを物語る箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、神の恵みの豊かさを憶えて告げられる祈りの言葉の箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「神殿奉献記念祭」の際に主イエスが神殿境内でユダヤ人たちに告げた言葉を伝える箇所。

**旧約日課(歴代下7章より)**

- ・「歴代誌」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」に区分される歴史物語文書。「諸書」の中でも「エズラ・ネヘミヤ記」に続いて最後に置かれてきており、この文書の扱いがユダヤ教の歴史の中で慎重であったことを示している(キリスト教会の「聖書」では、「列王記」に続く配置)。その内容は、アダムから始まって、ヤコブに連なる十二部族ごと、さらに支族ごとの系図を羅列することを経て、歴史物語は「サウルの死」から展開される。このような構成からも明らかなように、本書は、ダビデから始まる「ダビデ王家」とその王国にもっぱら焦点を合わせたものとなっており、王国時代の歴史物語として編纂された「列王記」からの引用転載と見られる箇所がある一方で、「列王記」では紙幅を割いている北王国イスラエルの諸王については、ダビデの王国ユダとかかわりのある場合を除いてほぼ完全に無視されている。「諸書」は、マケドニア王アレクサンドロスがペルシアを滅ぼし、中東地域にギリシア人の支配が確立されたヘレニズム時代に編纂、正典化がなされた文書群と考えられるが、この時代は社会文化のギリシア化政策に対抗するように民族主義的抵抗が散発した時代でもあり、「ユダヤ民族主義」の拠り所としての「ダビデ王家」を称揚する主張がユダヤ教の中でも強く影響を受けるようになっていたものと考えられる。「ダビデの王統」は、バビロン捕囚期には捕囚王ヨヤキンらによって命脈を保ち、その後ペルシア支配時代になっても、政治的な実権こそ失われていたと考えられるが、象徴的には「ユダの民」の盟主の家系として認知され続けていたと推認される。一方で、ユダヤ教共同体の主流は、「ダビデの王統」を事実上無視しながら、ただかつて「ダビデ王家」によって組織・任命されたということを拠り所とした祭司組織が実権を握ることになっていったと考えられる。
- ・日課箇所を含む7:11~22は、「列王記上」9:1~9と並行する記事である。ただし、日課箇所中、「このところを選び、いけにえのささげられるわたしの神殿とした。…わたしの目を向け、耳を傾ける」(12~15節)は、「列王記」にはない「歴代誌」に固有の叙述。犠牲奉献祭儀の場としての神殿の選びが強調されており、本書編纂の背景に祭司集団の特性がうかがわれる。

**使徒書日課(エフェソ3章)**

- ・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。本書全体の特徴は、資料「聖書と祈りの会 240821」を参照。
- ・日課箇所は、14節で提示されているように「祈り」として記されている。本書簡では、1章がもっぱら「讚美」(3~14節)と「祈り」(17~23節)として記されている。ただし、14節「ひざまずいて祈ります」は、ギリシア語「カンプトー・タ・ゴナタ」で、直訳は「ひざを折る」。
- ・この「祈り」で記される内容表現は、1:17以下の場合と類似して、宇宙論的な性格を強く帯びている。また、21節では、「教会」が事実上「キリスト」と同格に扱われている。本書簡には、1:20~23に特徴的に表れるような宇宙論的な救済観や「キリストの体としての教会」観が見られる。パウロは、「コリントの信徒への手紙一」12章でも「キリストの体としての教会」という教会観を提示しているが、そこで考えられているのは、ギリシア思想でもよく知られていた有機体的国家観を転用した組織論であり、具体的な地上の地域教会を想定している。それに対して、本書簡において提示される「キリストの体としての教会」は、宇宙的な広がりの中で全被造物を包摂する神の御業とほぼ同義的に位置づけられた「キリストによる救済」の具体的な表れとして、観念的な「キリストと一体化した教会」が構想されている。このような「キリストによる救済の場としての教会」の普遍化は、パウロが晩年に指向した調停的で包摂的な「救いの共同体としての教会」を突き詰めた結果として見ることもできるが、元来の「パウロ書簡」が「旧約」思想に根差して地上性に根差した主張を展開していることと比べてとき、思考の枠組みが大きく異なるとみなされ、パウロの主張であることに疑義を挟まれる理由ともなっている。もともと、これが「エフェソ」という当時の古きギリシア文化を継承してきた地に生きる信者に充てられた書簡であり、この地に拠点を置くようになった「ヨハネの教会共同体」が「ヨハネ福音書」などで展開しているような宇宙論的キリスト論との対話の中で記されたものであるとするならば、パウロが敢えて自らの思考の枠組みを変えて論述を展開していると解することもできる。
- ・15節直訳「天においても、地の上でも、すべての氏族(パトリア)は、その方から名を呼ばれている」。「その方」は、14節の「御父(パテール)」を指しており、ここで言われる「氏族(パトリア)」はその「御父(パテール)」のもとにある諸集団を指していると解される。つまり、この「すべての氏族(パトリア)」は、「御父」から「名を呼ばれる」ことによって成立した「氏族」であり、この「御父」を「わたしたちの父」(1:2)と呼ぶ者らの集団である「教会」を指していると解される。パウロがここで、それを敢えて一般に理解される地上の「教会」と特定しないのは、本書簡で宇宙論的な「教会」観を展開していること、それを従来の意味における地域共同体としての「教会」と区別するためかもしれない。

福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、本福音書が構成の枠組みとして用いる「祭り」の新しい区分、「神殿奉献記念祭」の枠組みの始まりにあたる。この枠組みは、11:54 まで続くが、実質的には 10:42 までで閉じており、11:1 以下は「ラザロの復活の逸話」に移行している。とは言え、「ラザロの復活の逸話」は、11:55 から始まる「過越祭」の枠組みと密接に関連していることが明らかであるが、敢えて「神殿奉献記念祭」の枠組みの中で解釈させようとしていると見ることもできるかもしれない。

・「神殿奉献記念祭(エンカイニア)」は、「宮きよめの祭」とも呼ばれる祭、すなわち今日、12 月頃に「ハヌカ」の名で祝われている祭を指す。これは、前 2 世紀、セレウコス朝シリアがエルサレム神殿のギリシア神殿化を強行したことに反発してユダ・マカバイらが武装蜂起して神殿を奪回し、ギリシアの神像を取り除いた後に聖別して再奉献したことを記念する祭りとして始められた。「聖書」に根拠を持たないが、前 2 世紀から後 1 世紀までハスモン王朝～ヘロデ王朝と約 200 年続いたユダヤ王国において、その正統性の根拠にもなる故事として盛んに祝われるようになったと考えられる。・ここでも主イエスは、ユダヤ人の問いかけに応じる形でご自身の主張を展開している。その主張は、これまでの箇所でも述べられてきていることと基本的に同じであり、目新しいことはない。他方、最初のユダヤ人の問いかけ、24 節「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」は、この箇所が「神殿奉献記念祭」という枠組みに置かれていることを踏まえて解される。彼らは、かつてシリアから神殿を奪還してユダヤ王国を建てたユダ・マカバイに代わる「メシア」であるのか、と問うているのである。

来週の誕生日 (9 月 15 日～21 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-3「扉を開きて」(= I 61「かがやくみとのよ」)は、17-18 世紀ドイツのカトリックと対立の激しい地方で牧師となった多作の讃美歌作家シュモルクの作詞。曲は、17 世紀ドイツの改革派の牧師ネアンダー(本名はノイマン)が詩編歌用に作曲。ネアンダーが住んだデュッセルドルフ近郊の谷は、彼にちなんで「ネアンデル谷」と呼ばれるようになったが、そこで発見されたヒトの化石が「ネアンデルタール人」。
- ・21-476「あめなるよろこび」(= II 150 番)は C.ウエスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番 = I 352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。
- ・21-442「はかりも知れない」(= I 246「かみのめぐみは」)は、C.ウエスレーの作詞で、彼の讃美歌集(1740 年発行)に収録されて以来、歌われてきた。

曲は、19 世紀米国の音楽家 L.ゴットシャルクのピアノ曲を E.パーカーが編曲したもの。

21-3「扉を開きて」

*Tut mir auf die schone Pforte*

- 1) Tut mir auf die schöne Pforte, / führt in Gottes Haus mich ein; / ach wie wird an diesem Orte / meine Seele fröhlich sein! / Hier ist Gottes Angesicht, / hier ist lauter Trost und Licht.
- 2) Ich bin, Herr, zu dir gekommen, / komme du nun auch zu mir. / Wo du Wohnung hast genommen, / da ist lauter Himmel hier. / Zieh in meinem Herzen ein, / laß es deinen Tempel sein.
- 3) Laß in Furcht mich vor dich treten, / heilige du Leib und Geist, / daß mein Singen und mein Beten / ein gefällig Opfer heißt. / Heilige du Mund und Ohr, / zieh das Herze ganz empor.
- 4) Mache mich zum guten Lande, / wenn dein Samkorn auf mich fällt. / Gib mir Licht in dem Verstande / und, was mir wird vorgestellt, / präge du im Herzen ein, / laß es mir zur Frucht gedeihn.
- 5) Stärk in mir den schwachen Glauben, / laß dein teures Kleinod mir / nimmer aus dem Herzen rauben, / halte mir dein Wort stets für, / daß es mir zum Leitstern dient / und zum Trost im Herzen grünt.
- 6) Rede, Herr, so will ich hören, / und dein Wille werd erfüllt; / nichts laß meine Andacht stören, / wenn der Brunn des Lebens quillt; / speise mich mit Himmelsbrot, / tröste mich in aller Not.

21-476「あめなるよろこび」

*Love Divine, All Loves Excelling*

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.

21-442「はかりも知れない」

*Depth of Mercy! Can There Be*

1. Depth of mercy! Can there be / mercy still reserved for me? / Can my God his wrath forbear, / me, the chief of sinners, spare?
2. I have long withstood his grace, / long provoked him to his face, / would not hearken to his calls, / grieved him by a thousand falls.
3. I my Master have denied, / I afresh have crucified, / oft profaned his hallowed name, / put him to an open shame.
4. There for me the Savior stands, / shows his wounds and spreads his hands. / God is love! I know, I feel; / Jesus weeps and loves me still.
5. Now incline me to repent, / let me now my sins lament, / now my foul revolt deplore, / weep, believe, and sin no more.